

たまのよこやま

特集

東日本大震災
復旧・復興支援報告 V

平成30年度企画展示

好評開催中!!

特集 東日本大震災復旧・復興支援報告 V

(公財)東京都スポーツ文化事業団では、平成25年度から(公財)福島県文化振興財団(以下「福島県財団」)へ職員を派遣し、復興業務として発掘調査の技術支援を行っています。5年目となる平成29年度は、私、およがわよしひこ しゅつごう及川良彦が^{およがわよしひこ}出向しました。

平成29年度、福島県財団では5事業の発掘調査を実施し、東京都の私とともに山形県からも1名の出向を得て、早期の復旧・復興に努めました。

私が配属された遺跡調査部調査課4班は、ふたばぐん双葉郡^{ふたばぐん}柵葉町^{ふたばぐん}大谷上ノ原遺跡の発掘調査を担当しました(図1・写真1)。前年度の隣接地区からの続きで、前年度は、平成28年度出向の山田和史調査研究員が担当していました。

柵葉町のある太平洋沿岸部では、東日本大震災により甚大な被害を受け、その後の福島第一原発の事故のため多くの人々が避難を余儀なくされました。柵葉町は平成27年9月に避難指示の解除がなされ、少しずつですが帰還が進みつつあります。こうした帰還を促進するために、さらには今後の災害への対応、復興への支援、観光来訪促進による地域の活性化、救急医療活動の支援、恒常的な渋滞の緩和を目的に、柵葉町内の常磐自動車道にスマートインターを設置することになりました。そこでインター建設工事に先立ち、常磐自動車道ならばスマートインター建設予定地内にある大谷上ノ原遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を行いました。発掘調査は、調査面積9,300㎡の範囲を平成29年4月から12月までの間、調査員3名、発掘支援会社雇用の作業員・オペレーター40名体制で実施しました。

ところで、福島県財団では作業員を現地で募集し採用する現地主義をとっていました。しかし柵葉町をはじめとした近隣の住民帰還率がいまだ低く、前年度は作業員募集を何度行っても集まらず大きな問題となっていました。この点を克服するために今年度は作業員の募集から雇用まで一括して発掘支援会社に委託することにし、それによって広い範囲から作業員を集めることができました(写真2)。

大谷上ノ原遺跡は今回で第6次の調査になりま



図1 平成29年度福島県財団調査位置図



写真1 大谷上ノ原遺跡全景(写真左は常磐自動車道のならばPA。ここにスマートインターを作るための事前調査



写真2 遺跡調査風景

す。今までの発掘調査では旧石器時代・縄文時代と奈良・平安時代の遺構と遺物が見つかっています。特に、旧石器時代は3万年を遡る石器が出土し、県内の太平洋沿岸部を代表する遺跡として知られています。

今回の調査地点は、台地平坦面から斜面部にかけてです（写真1）。奈良・平安時代では2軒の竪穴住居跡が発見され、そのうちの1軒、15号住居跡は面積4㎡、約2畳半という極めて小さい構造でした（写真3）。大人二人も入ればもう一杯という規模です。

縄文時代では、前期前半の竪穴住居跡が7軒発見されました。そのうちの14号住居跡では竪穴部の周囲にも柱穴が伴うことが判明しました（写真4）。また、内部からは土器とともに石器が多数出土しました。この他、17号住居跡からは炭化したドングリがまとまって出土し注目されました。

旧石器時代では5か所の石器集中部が検出され、それぞれ地点を異にして約10m四方程度の広がりを見せていました。このうち7号石器集中部では尖頭器（石槍）の製作を行っていたことが判明し、石器を作る際の石のハンマーも見つかりました。おおよそ2万年前のものと考えられます（写真5）。これ以外の石器集中部ではナイフ形石器や切出形石器などが出土しており、さらに古い3万年前頃のものも含まれています。

12月2日に遺跡現地説明会を実施しました。地元の方がまだ少ないため参加者が少ないのではと不安もありましたが、75名の参加者を数えることができました（写真4・5・6）。遠く仙台や東京から研究者の来訪もあり、遺物の展示コーナーではホットな議論も沸き起こりました。

調査は12月で終了し、1月から3月までは福島市内で出土品や記録類の整理作業を行いました。平成30年度中に報告書を刊行する予定です。

この1年間、東京では体験することのない調査ができました。また、福島県財団・県文化財課、さらに県へ派遣された全国各地の文化財職員との交流と情報交換も定期的に行うことができました。こうした経験や人脈を今後の事業に活かしていきたいと思っています。最後に、福島県の復興には今後も継続的かつ長期にわたる支援が必要だということを付け加えておきたいと思っています。



写真3 超小型のカマド付き竪穴住居跡



写真4 縄文時代前期住居跡（遺跡現地説明会）



写真5 旧石器時代7号石器集中部（遺跡現地説明会）



写真6 現地説明会（3万年前の石器を実際に手に取ってもらいました）

小日向一・二丁目南遺跡(文京区No.118遺跡)は、東京メトロ有楽町線江戸川橋駅の北方約200mにある「小日向台」という高台の縁辺部に立地します(写真1)。

今回の発掘調査地は遺跡の北半部に位置し、江戸時代から明治時代にかけては「龍興寺」という寺院の境内域と墓域に該当します。境内域と思われる範囲では建物の基礎や地下室、墓域であったと思われる範囲では墓などの埋葬遺構が見つかりました。調査区北西部では、本堂の基礎であったと思われる重厚な礎石が並ぶように検出されました。また、調査区北東部で見つかった複数の礎石には墓の台石が転用して使用されており、寺院ならではの風変わった建物の基礎構造を確認できました(写真2)。

今回の調査では、江戸・明治時代の遺構と遺物が多数検出されましたが、これらの遺構の下に古墳時

代後期を中心とするムラが良好な状態で保存されていることがわかりました。平成30年6月現在、当該期の竪穴建物跡は18軒確認されています。検出された竪穴建物跡は、重ならないよう一定の間隔をあけて配置され、その多くは崖線と平行になるように建物の軸を揃えて造られていました。これらの検出状況から、今回発見されたムラは計画的につくられた可能性も考えられます。C36号遺構は古墳時代後期の竪穴建物跡ですが、壁を拡げて建物を大きく造り直したり、カマドの焚口を3個の竈で鳥居状に組んで作ったり、他とは異なる様相を呈していました(表紙写真・写真3)。当時、この竪穴建物ではどんな人が生活していたのでしょうか。

本遺跡は、都心部では珍しい古墳時代から現代に至るまでの、人々の生活や土地利用の変遷を知ることができる貴重な遺跡と言えるでしょう。(岩井聖吾)



写真1 発掘調査地点の立地



写真3 古墳時代後期の竪穴建物跡(C36号遺構)



写真2 墓石を礎石に転用した基礎

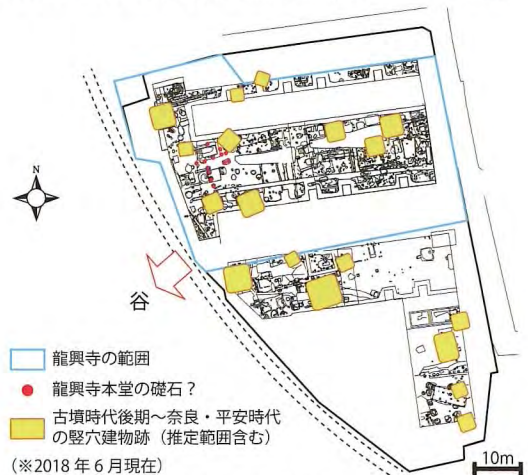


図1 検出遺構配置図(平成30年6月現在)

かゆい所に手が届く

遺物の基本的な見方 縄文土器編⑥

縄文土器をよく観察すると、表面にポツポツと小さな穴を見つけることができます。これらの穴の大半は気泡と呼ばれる空気の穴で、粘土をこねるときに入り込んだ空気や、土器焼きのときに発生したガスなどによるものです。しかし土器の穴を詳しく調べると、気泡ではなく、植物のタネの痕跡が見つかることもあります。そこで今回は、「土器の穴」について考えてみましょう。

土器の表面に残る植物の種子や果実の穴は、「種実圧痕」と呼ばれています。もともと土器に埋まっていた種実は土器焼きのときに燃えてしまい穴になりますが、粘土に種実の形や細かな組織が写し取られることで、土器の穴、すなわち圧痕からどのような種実だったのかを明らかにすることができます。最近の研究では、歯の型取りに使うシリコン樹脂を圧痕に流し込んでレプリカを作り、そのレプリカを顕微鏡で観察して植物の種類を特定する「圧痕レプリカ法」という手法がよく使われています(図1)。圧痕レプリカ法の研究が進む中部高地では、縄文中期を中心としてマメやエゴマなどの圧痕が数多く発見され、なかには栽培によって大型化したと思われるダイズも発見されています。

多摩ニュータウン遺跡群は、関東地方のなかでも

縄文中期の集落が多く見つかる地域として有名です。集落に土器はつきもの。当センターには多摩ニュータウン遺跡群から出土した縄文土器がたくさん収蔵されており、近年、当センターでも縄文中期土器の圧痕調査を進めています。

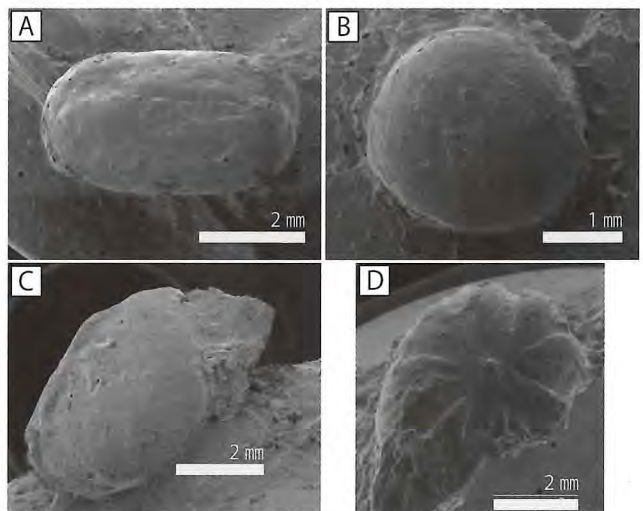
多摩ニュータウン遺跡群の圧痕調査の結果、約260kgの土器片から50点を超える種実圧痕が見つかりました。もっとも多いのが、ダイズ(図1-4)やアズキ(図2-A)などのマメ科種子やエゴマ(図2-B)です。これらは今日でも利用されている種実で、私たちにも馴染みのある食材ではないでしょうか。しかしその一方、現在では利用法がよくわからないキハダ(図2-C)やミズキ(図2-D)などの種実も多く見つかっています。縄文人の生活の知恵については、まだまだ未知の世界がありそうです。

植物の種実は、通常は腐ってなくなってしまうことが多く、炭にならない限り遺跡から出土することはほとんどありません。サイズも小さく、見つかりにくい遺物と言えます。しかし圧痕レプリカ法を用いることで、今までに知られていなかった縄文人の植物利用のあり方を解明することができるのです。「土器の穴」に注目することも、縄文土器のツウな見方の一つと言えるでしょう。(大網信良)



1: 圧痕が見つかった土器 (No.245 遺跡出土)、2: 圧痕部分の拡大、3: 圧痕を型取りしたシリコンレプリカ、4: レプリカの電子顕微鏡画像

図1 縄文中期土器のなかのダイズ圧痕



A: アズキ亜属種子 (No.446 遺跡)、B: エゴマ果実 (No.72 遺跡)、C: キハダ種子 (No.520 遺跡)、D: ミズキ核 (No.72 遺跡)

図2 多摩ニュータウン遺跡群で発見された縄文中期土器の種実圧痕

いま あの遺跡は現在！？ Vol.13

— 多摩平の森 日野市山王上遺跡^{さんのううえいせき} —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

JR 豊田駅の北口を出て徒歩 3 分程、豊田駅北口交差点の北東側の、日野市豊田二丁目から四丁目にかけて、大型商業施設や保育施設、高層団地（多摩平の森）が広がっています。

この場所にはかつて、都下のニュータウン第一号として、昭和 33 年（1956）に旧多摩平団地が建設されました。その後、建設から 40 年が経過した団地の建て替えと、区画整理が計画されます。その際行われた日野市教育委員会による予備調査で、団地の下には、縄文時代から中世に至る遺跡が埋もれていることが判明し、発掘調査が行われることになりました。

東京都埋蔵文化財センターによる発掘調査は平成 17 年に始まり、途中期間を置きながら平成 24 年（2012）までの 8 年間、調査面積は延べ

93,468 m²（北東の日野市 No.51 遺跡を含む）に及ぶ大規模な調査でした。

遺跡からは旧石器時代、縄文時代、古代（奈良・平安時代）、中世に至る多種多様な遺構・遺物が発見されています。旧石器時代の地層からは約 25,000 年前のナイフ形石器が出土し、これは日野台地内の遺跡で最も古い資料となります。また、古代の住居跡からは丸鞆金具^{まるともかなく}が出土しています。これは古代の役人が着ていた衣服の帯（ベルト）金具であり、この住居に暮らしていた人の身分を知ろうえで重要な資料となります。

梅雨時の、外出が億劫^{おっくう}になる季節ですが、皆さんも今住んでいる場所が、かつてどのように使われていたのか調べてみませんか。

（武内 啓）



写真 1 調査区西側に造られたショッピングセンター（写真左）とその北西部（写真中央）。写真右は調査中の様子。交差点向かいの建物は現在も残っており、調査前との位置関係を確認することが出来る。



日野市教育委員会提供



日野市教育委員会提供

写真 2 調査で発見された約 25,000 年前（旧石器時代）の黒色頁岩製のナイフ形石器（写真左）。役人の革帯に装着する丸鞆金具（写真右）。裏面には帯に装着した脚鉾（ピン）の痕跡も残っていた。

多摩ニュータウン遺跡 964 箇所の中なかでも、二桁台の番号が振られている遺跡の中なかには、東京都埋蔵文化財センターが設立される前に東京都教育委員会や遺跡調査会において調査が行われていた、いわば“老舗”ともいえる遺跡があります。

その中の一つといえる No.27 遺跡は、総面積 15,300 m² を占める広大な遺跡です。永山駅の北西側線路沿いにあり、遺跡の調査は昭和 49 年 (1974) から開始されました。地形的には、多摩川の支流である乞田川の下流、丘陵地に入り込む

谷の出口にあたる台地上であり、調査当初から多くの成果が期待されていた場所です。調査は 10 次にわたり断続的に行われ、我々は最後の調査を担当しました。調査員は 3 人です。

検出された遺構・遺物は、旧石器、縄文、平安、中・近世にわたります。その中で、旧石器時代に相当する石器群は、AT 層以下の層からローム層最上層のソフトローム層まで幅広く石器が出土し、石器の総点数は 11,292 点、礫群は 35 箇所も検



遺跡遠景 (昭和 49 (1974) 年当時の永山駅周辺)

出されるなど多摩ニュータウン遺跡群屈指のもので

です。縄文時代では、前期初頭の花積下層式期の相当する^{はなづみかそうしき} 竪穴住居跡が 4 軒と中期加曾利 E 式期の住居跡が単独で 1 軒検出されています。多摩ニュータウン遺跡群では、花積下層式期の竪穴住居跡を検出した遺跡は 6 遺跡で総数 10 軒なのですが、そのうちの 4 軒を検出しており、当該時期の土器研

究や集落研究には欠かせない資料となりました。

その他、平安時代の竪穴住居跡 24 軒、中世では地下式坑^{ちかしきこう}、溝、井戸、中国陶磁^{とこなめさんかめ}、常滑産甕、近世では掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてものあと}、井戸跡、土坑、溝や、石臼、陶磁器類などが検出されました。このような盛り

1/964

多摩ニュータウン地域では、964 ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

37 多摩ニュータウン No.27 遺跡

皆さんの“老舗”遺跡の最終次の調査を、東京都埋蔵文化財センターに就職して 1 年目に担当しました。調査がやっとローム層までたどり着いたら、ローム層中からとめどなく石器や礫が出てきたため、期限内の調査を終了することができず、石の

破片を呪ったものです。

ローム層の調査は“土を動かしてなんぼ”です。当時の遺跡調査ではほとんど使われていなかったバックフォーを数台導入し、土のやりくりをしながら細かい剥片を探しました。今では当たり前のように導入されているバックフォーですが、当時は賛否両論ありました。



「次に担当する現場では、旧石器は当たりませんように…」

出土した旧石器時代の石器

と、現場が変わるたびに祈っておりましたが、なぜかそれからしばらくの間、旧石器の発見される現場の発掘が続いたのでした。

(武笠多恵子)



多摩ニュータウン No.27 遺跡位置図

蒼海わたる人々

考古学から見たとうきょうの島々

島の人々は様々な場面で貝を利用していました。展示品の中にも貝に係わるものが幾つもあります。

【貝の腕輪－貝輪－】

展示品のオオツタノハ製貝輪（写真1）、「小さっ!!」と思った方も多いのではないのでしょうか。貝輪は全体的に小さ目のものが多く、手の細い子供のうちに装着されたとも言われています。しかし、この貝輪は穴がいかに小さく、子供でも装着困難と思われるような大きさです。

よく見ると、本来は細身に滑らかに磨かれているはずなのに、輪幅がやたらと太く、磨かれていません。どうやら、穴が



写真1 オオツタノハ製貝輪

られただけで仕

上げ加工がされていないようです。弥生時代のオオツタノハ製貝輪は、貝の捕獲地に近い三宅島で穴をあける一次加工を行い、本拠地三浦半島へ持ち帰って仕上げられたと考えられています。ですから、このように一次加工のみが施されたものは、本格的な加工の前に素材が工人の手元に保管されていた状況を反映している可能性があり、興味深いものです。

【土器に文様を付けた貝】

八丈島の倉輪遺跡で出土した土器の中には、巻貝の先端で文様を付けたものがあります（写真2）。胎土が白っぽく、本州西日本のものと考えられるこの土器、特徴的な貝の文様を手掛かりに作られた地域をさらに絞り込もうと、文様の型取りを試みました。その結果、使われた貝は螺塔（巻いている部分）が低く先端がツンと尖っていること、螺肋（縦方向の筋）と顆粒（つぶつぶの模様）が顕著だということなどがわかりました。現時点では貝種を特定できていませんが、このような特徴を持つ貝は限られるので、いずれ貝種とともに土器の作られた地域も判るのではないのでしょうか。



写真2 貝殻刺突文（右：拡大）

その時、土器のふるさとと八丈島倉輪の間にはどのような「蒼海わたる」ストーリーが浮かび上がってくるのでしょうか。きっと、黒潮と格闘しながら太平洋を行き交う人々の壮大な物語ではないのでしょうか。

【貝で作った斧】

北硫黄島の石野遺跡では貝斧が出土しました（写真3）。本州には貝で斧を作るという文化伝統がないので“貝で斧が作れるのか?!”と心配になってしまいましたが、これはシャコガイ製の立派なものです。シャコガイは太平洋中西部やインド洋に生息する大型の貝で、南洋地域との関連が窺われます。また、関連資料として展示されている南洋のアウトリガー・カヌーの模型には、本物と同様、材としてタコノ



写真3 石野遺跡出土貝斧

キが多用されています。タコノキは、小笠原の特産品でもあり、約2,000年前の北硫黄島にも生い繁っていた

たことでしょう。遺跡を遺した人々は、貝の斧でタコノキを伐り、カヌーを作り、太平洋へと乗り出していったのでしょ

う。黙り込むことを「貝のように口をとざす」などと言いますが、遺跡から発掘される貝はなかなか雄弁です。それらを通して人々の暮らしぶりに思いをめぐらせてみて下さい。面白いこと間違いなしです。

（両角まり）

※今号の表紙：文京区小日向一・二丁目南遺跡 C36 号遺構（古墳時代後期の竪穴建物跡）のカマド調査風景。



たまのよこやま 113

2018年6月29日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>